



会場・日本都市センター

早川 正巳・一色 直記・小野 晃司

青葉かおる5月の9日から19日まで 海外から約80名の火山学者を迎え 国内の火山関係学者約140名の参加を得て 東京 浅間 箱根において 国際火山学会議 (International Symposium on Volcanology) が開催された。それに引き続き25日まで 九州 北海道 大島の各地区にそれぞれ分かれて見学旅行が行なわれた。

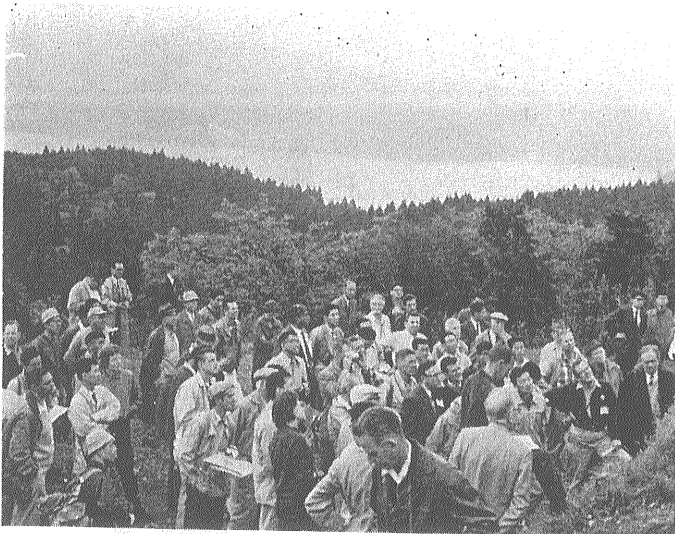
この会議の内容は すでに新聞 ラジオ テレビ等で報道され また総合の報告は この会議の主催者である日本学術会議から出されることと思うので ここでは詳細をさける。地質調査所からも兼子所長をはじめ 地質 物理探査 地球化学の諸部門から所員が参加し さらに19日には 主として外国からの参加者30名近くが川崎市溝ノ口の地質調査所を見学した。ここに われわれの印象を簡単に記してみよう。

会議のおもな講演・討論題目は 「火山噴火の時と場

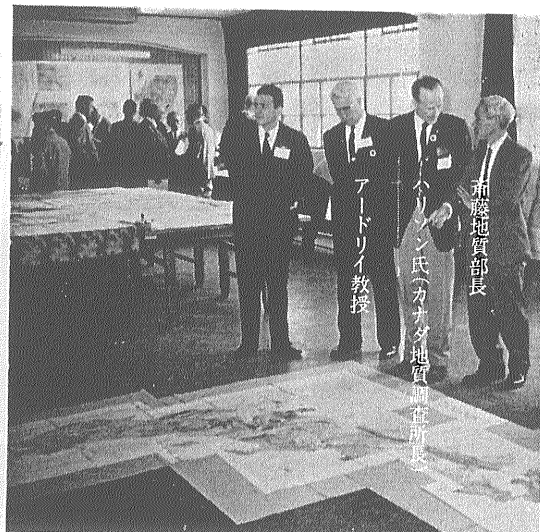
所との予知」と「マグマと噴火の性質との関係」の2つであった。この会議を成功させるために 学術会議では早くから組織委員会をつくって準備に力を入れ 日本火山学会の会員 国内の火山学者や関係方面の協力を得て 海外19カ国から数多くの第一線学者の参加を見ることができた。

外国からの参加者の中には 会長リットマン (Rittmann: スイス) 副会長ブロードベッツ (Vlodavetz: ソ連)をはじめ テイラー (Taylor: オーストラリア) エブラルド (Evrard: ベルギー) アツフェン (Uffen: カナダ) サハマ (Sahama: フィンランド) ジェズ (Gèze: フランス) タジエフ (Tazieff: フランス) インボ (Imbò: イタリア) ペンタ (Penta: イタリア) N・パダン (N. van Padang: オランダ) ヒーリー (Healy: ニュージーランド) ティーリー (Tilley: 英国) アードリー (Eardley: 米国) イートン (Eaton: 米国) グリーン (Green: 米国) カルプ (Kulp: 米国) ムラタ (Murata: 米国) オズボーン (Osborn: 米国) パワーズ (Powers: 米国) シェイラー (Schairer: 米国) ヨーダー (Yoder: 米国) など われわれに耳なれた多くの人々の名をあげることができる。したがって講演会 パーティー 見学旅行 研究所見学などをとおして 平生直接話し合うことのできなかった外国の専門家と 日本の参加者とがいきまじって友好をあたため 議論をたたかわす機会を得たことは 何といても今回の会議の1つの大きな収穫であった。

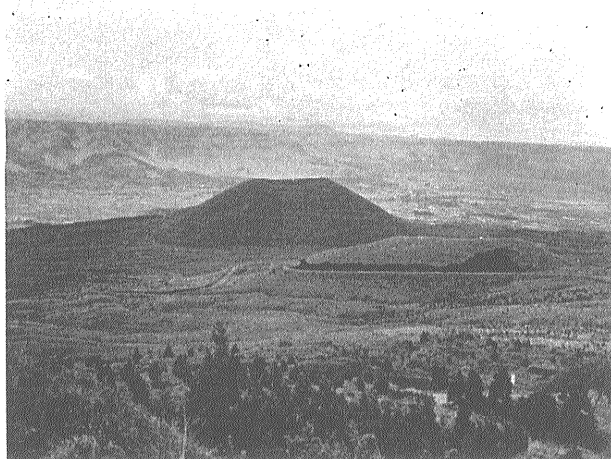
講演総数49 中16は日本人によるもので 地質・地球物理・地球化学の各分野を含んでおり 討論もなかなか活発に行なわれた。どの講演がとくに興味深かったかは各々の専門 好みもあり なかなかむずかしいが



箱根峠付近で東京大学久野教授の説明を聞く一行



地質調査所の地質図展示室を参観中の一行



阿蘇中岳登山道路から見た水塚岩滓丘(阿蘇火山中央火口丘群の1つ)背景の水平に連続する崖は阿蘇カルデラの北縁

各分野の共通の問題としては たえば箱根で行なわれた「岩石の高温・高圧下での実験」についての一連の講演など マグマの成因や結晶分化の過程を明らかにするという本質的な意味で得るところが多かった。またハワイの火山体の構造と噴火の機巧に関する研究は身近なものとして感じられ 同じくハワイ キラウエア火山の1959~60年の噴火のカラー映画は まことにドラマチックなものであった。火山砕屑流についての討論は室内 野外を問わず 幾度も繰り返されていた。なお今回の出席者の中には 地熱に関係のある学者も見ていたので 地熱調査会や関係者間で種々討議する機会をもち得たことは幸福であった。

全体を通じて痛感したことは 火山学の進歩のためには 地質学・地球物理学・地球化学のさらに密接な協力が必要であるということであった。この点についてはわれわれもとくに反省の必要がある。

立場をかえて外国の人たちにとっては 東京大学地震研究所の水上教授を中心とする長年に渡る浅間火山の地

球物理観測などが非常に興味深かったようである。箱根では東大地質の久野教授が長年の研究をもとにして火山体の構造それを構成する岩石の成因について現地説明を行ない 有益な議論を通じて得るところが多かった。

討論会終了後の旅行は九州 北海道 大室山・大島の3班に分かれて行なわれた。九州旅行の一行は指宿に第1夜を明かし 翌日は桜島の大正・昭和熔岩 観測施設や 鹿児島付近の始良火山の軽石流堆積物(シラス)などを見学した。その翌日は 熊本からバスで阿蘇へ向かった。中岳に登る途中 雄大な阿蘇カルデラを見渡して感嘆し 活動火口では 噴煙を吐く火口底を見下す幸運に恵まれた。京大 気象庁の観測施設とカルデラ北縁大観峯の地質を見てホテルに着いたのは 8時過ぎという熱心さだった。

最終日は2班に分かれ 1班は京大の火山研究所を訪れ 他はカルデラ東縁の滝室坂で 先カルデラ噴出物を見学した。このルートで見られるみごとな熔結凝灰岩の露頭では 一同討論に時間を忘れ 日程の忙しさが惜しまれるばかりだった。北海道では 湯の川を振出しに 駒ガ岳に登り 1929年の活動による降下軽石 軽石流 安政火口をよぎる1942年の爆発でできた割れ目などを興味深く見学した。長万部からニセコ・羊蹄の南を過ぎ洞爺カルデラの北辺にでて昭和新山に登った。ここでは一同が非常に興味をもったことはさらに説明の要なし。屋根山からドームがあらわれた時の擦痕や 今なお地表面の割れ目を通じ 700°C 以上の温度を示す亀の甲岩あたりでは いつまでも離れようとしなかった。登別の地獄をたずね 札幌へでて解散した。

札幌で行なわれたレセプションの席上 ジェズ氏(フ



大沼公園の宿舎から見た駒ガ岳(北海道)



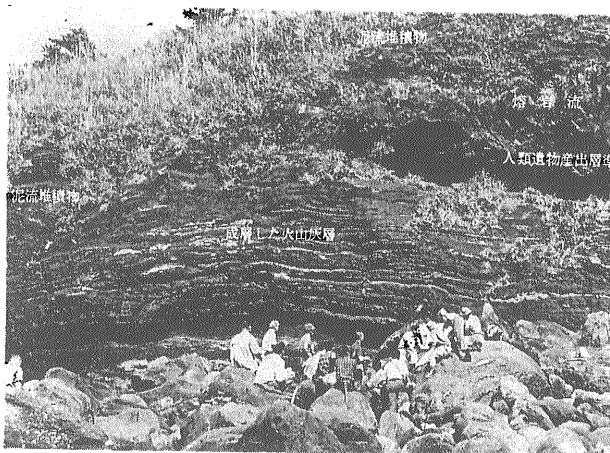
昭和新山ドーム前で(中央はエブラルド教授)

ランス)は「日本人は幸福である 子供の時から火山の近くで育ち したがって何時とはなく火山に興味をもち この道にはいる ひとりでの火山学が進歩する環境にある日本人をつくづく羨ましく思う」と結んだ。ヒーリー氏(ニュージーランド)は「ニュージーランドでは 火山が爆発しても人口が少ないから被害はないが 日本は立場がちがう」とも言われ われわれは責任を痛感した次第である。

大室山火山群および大島の見学旅行の主目的は 伊東市の南にひろがる大室山火山群および伊豆大島で見られるさまざまな火山地形(成層火山 岩滓丘 熔岩台地 爆裂火口など)の見学 火山灰層位学によって明らかにされた近接火山の噴出順序 あるいは 1つの成層火山での周期的な火山活動を示す野外での事実の観察 および大島で代表されるソレイアイト質岩系の玄武岩と 大室山火山群の高アルミナ玄武岩系の玄武岩・安山岩の新鮮な標本の採集であった。

5月20日午後 一行は伊東市から観光バスに便乗 城星・小室山・大室山・梅ノ木平の諸火山を巡り これら火山の熔岩に含まれる斜長石 石英の捕獲結晶から花崗岩質岩層の存在を論じ また美しい円錐形の大室山岩滓丘噴出物をその北東麓にある熔岩丘が覆っている地点を観察した。

翌朝伊東港発。久野・オスボン両教授を中心として玄武岩マグマの分化経路を論議する参加者を乗せて船は大島へ。すぐに岡田港の西崖に露出する岡田火山の複合自迸入岩体を見学。露頭前でその生成機巧を説明する久野教授 また他方ではスクリップス海洋研究所ナユズ氏と案内者の1人中村氏とが パラゴナイト化作



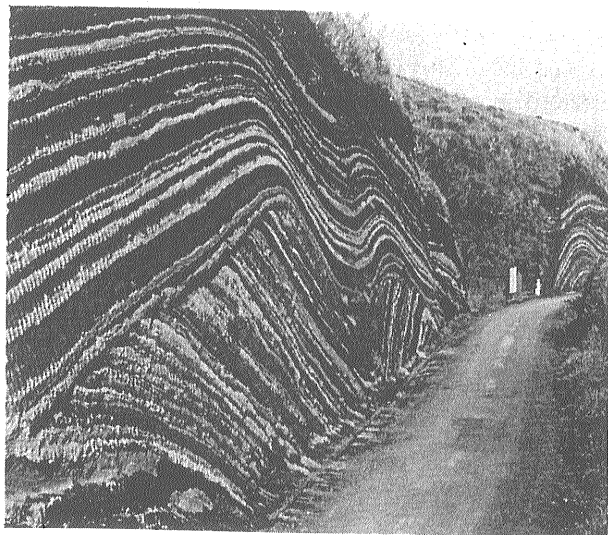
大島 竜ノ口 人類遺跡の前で

用の有無から同熔岩が海中噴出か 陸上噴出かを論ずるといった調子 午後は 熔岩流に覆われて焼けた竜ノ口人類遺跡 大切断面(写真参照)を観察 歌で名高い波浮港爆裂火口までバスを駆る。

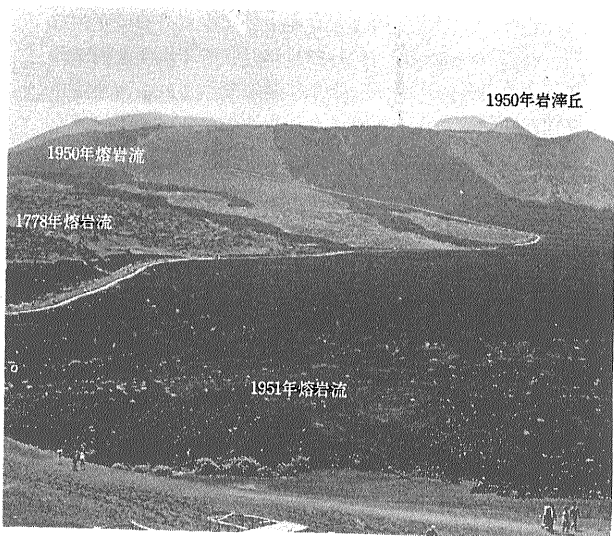
22日 まず島の北東腹まで行き カルデラの北東縁を越えて流下した1552年と1778年の熔岩が層準の異なった火山灰層に挟まれている状態を観察し カルデラ縁の御神火茶屋からは三原山と その前にひろがる1950~1951年熔岩原を称賛し さらに三原山の現中央火口の縁まで近づき その深さに一驚した。午後は西海岸野増にある東大震研の火山観測所の諸設備を見学した後 橋丸で御神火煙る大島をあとにした。

以上断片的に書きならべたが 今回の国際会議は非常に愉快的な雰囲気を終始し いたる所でほほえましい風景をかもし出しながらも 内外人共に得るところが多く また将来への研究の意欲をそそったことは事実であろう。

(早川課長は物理探査部・色・小野技官は地質部)



美しく成層した降下火山灰層の露頭「大切断面」(大島間伏)



大島 三原山 (御神火茶屋から)